

岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎 (編)

## 新臨床栄養学

武藤泰敏

(岐阜大名誉教授)

かつて、『栄養化学概論』〔芦田 淳 (著), 養賢堂〕という名著があり, 多くの人々が正しい栄養学を学ぶことができた。しかし, 現在「食物や食品に含まれる栄養成分のみをテーマとするのではなく, 同時に, それを受け入れる人間の側に立って考察していく」風潮が大きな支持を得つつあります。さらに, 高齢者の栄養を考える時, “人間の尊厳” を重視した「人間栄養学」をめざした努力も押し進められています。

このような視点に立った栄養学の名著が次々に上梓され, わが国に輸入されています。特に, Garrow らによる “Human Nutrition and Dietetics” (邦訳: 『ヒューマン・ニュートリション—基準・食事・臨床』医歯薬出版), Allison

の “Nutrition in Medicine A Physician's Views” (邦訳: 『医師のための栄養学』ダノン健康栄養普及協会) などは真に味わいのある栄養学の指導書といってよいと思います。

しかし, 残念ながら, 日本人を対象とした系統的な人間栄養学(臨床栄養学)の専門書は決して多いとはいえません。このたび外科, 内科, 小児科領域の編者からなる, 綿密な企画に沿った意欲的な著書が, 医学書院から刊行されたのは注目に値します。「栄養は力」であるという自己体験をもつ臨床家として, 病態改善を優先させた「栄養治療」は“医食同源”という東洋思想にも合致したもので, 薬物治療に勝るとも劣らない, しかも, 身体に優しい治療法といえ

ます。

栄養アセスメントから栄養治療へ, チームワークから多職種協働の NST へ, 生活習慣病の栄養学(内臓脂肪の役割), 時間栄養学, オーダーメイドの栄養学(個の栄養学), など新しい領域の病態栄養学が精力的に盛り込まれております。

なかでも, 糖尿病の記述は圧巻であり, 摂食・嚥下障害, 肝移植も大変優れた内容ではないかと舌を巻いた次第です。高齢者の栄養学(骨格筋萎縮 Sarcopenia)は今後の一大テーマですが, 倫理的にも統一した見解が十分とはいえません。合併症に密接に関与した低栄養は当然治療の対象になります。一方, “irreversible” な(超)高齢者の低栄養状態は果たして “aggressive” な処置をすべきかは問題で, 安らかな「死の準備」の裏返しではないかとも想像されてなりません。

●B5/頁 640/2007 年/定価 9,975 円  
(本体 9,500 円+税 5%)  
[ISBN978-4-260-00284-4]  
医学書院 刊